

校長室だより 2026 年度10月号



**Be Creative !**



# この人に会いたいー丸木スマ展



「この人に会いたい」Instagramでたまたま見かけた美術館のポスターであった。「この人の絵を直接観てみたい。そして、なによりこの人に会いたい。」大げさに聞こえるかもしれないが、この人が「呼んでいる」ように思ったのである。その人は丸木スマという。「丸木」という名字から思い浮かぶ画家の名前がある。しかしながら、当初は結びつかず、ただただこの人の絵を観たい、この人のことを知ってみたい、それが始まりであった。彼女の絵は大胆にして素朴。絵の中には

は動物や鳥や魚や人、花々や植物、野菜や果物、数々の生命力がまるで「曼荼羅図」のように詰まり、画面いっぱい、その生命力が描かれ尽くされている。心のままに、そして「わし流」に。何とも自由なのである。スマさんの言葉を紹介しよう。「わしも、あんたたちのように、むこうとそっくりにやってみよう、と思うが、うまいぐわいにはいかんのう、わしはわし流にやるより仕方がない。」この「あんたたち」とは彼女の長男丸木位里とその嫁の俊のことである。俊たちの勧めで、彼女が初めて絵筆を手にしたのは73歳の時であった。働き者だったスマが隠居し、暇そうにしているのを見かねて、俊が「絵を描いてみたらどうか」と勧めたのだと言う。女流画家丸木スマの誕生であった。

丸木位里・俊と言えば「原爆の図」を描いた画家である。今から20年余り前、広島を中心とする中国地方への修学旅行に取り組んでいたころ、平和学習の一環として、彼らが書いた文章を用いて、国語の授業を行っていた。広島を故郷とする位里が原爆の投下を知り、父母や家族の身を心配して帰省したのは、原爆投下後3日目のことであった。1週間後に俊も合流し、救護活動を行う中で、自分たちが目撃した光景や被災者の証言をもとに、約30年をかけて15部から成る「原爆の図」を完成させた。位里は水墨画、俊は油絵と、専門にするものは異なっていたが、両者の技術を掛け合わせ、被災した人間に焦点をあて、ほぼ等身大の群像として描かれているところに特徴がある。この位里の母親がスマであった。父の金助は原爆病でこの後亡くなっている。何も知らなかったことは少し恥ずかしいが、ここで私が会いたいと願ったスマが、丸木位里・俊とつながったことは何ともうれしい。会えて本当によかった。

美術研究家永井明生氏の言葉を紹介する。「スマは人生の歩みの中で多くの苦労を経験したが、それらを恨みや悲しみとして捉えなかった。命あるもの全ての生を肯定し、絵画の制作を通して生きる喜びへと昇華させた。そのようにして生み出されたスマの作品からは、作者の温かな人間味が感じられる。その飾らない絵画世界は、見る者に驚きと親しみを同時にもたらし、新鮮な魅力を今も放ち続けているのである。」滋賀県立美術館で開催されている「丸木スマ展」の最後は、彼女の「簪（かんざし）」と題された絵画で締めくくられている。その絵に添えられた俊の言葉である。「私たちは、きらきらと輝く簪をこの絵の題名にして、働きとおした女、おばあちゃんの生涯を飾ることにした。 丸木 俊」